



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

場所の芸術(4) : 岐阜大学芸術フォーラム

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: 出版者: 岐阜大学教育学部 公開日: 2023-12-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野村, 幸弘 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12099/0002000206 |

場所の芸術（4）—岐阜大学芸術フォーラム

The Arts in Place (4) — The Art Forum of Gifu University

野村 幸弘

Yukihiko Nomura

「岐阜大学芸術フォーラム」開催の経緯

わたしは1994年から、神社、工場、商店街、空き地、河川敷など、さまざまな場所で、その場所の特性を活かした「幻聴音楽会」というコンサートを年に1、2回開催してきた。⁽¹⁾ それ以外は、大学で講義と研究をしていたので、ほとんどの時間を大学の環境、空間で過ごしていたことになる。わたしの研究室がある美術棟には、低い塀に囲まれた前庭があり、その向こうにはかなり広い芝生と櫻けやきの木立がある。毎日見る風景なので、特別な思いはないが、県外や外国から友人が訪ねて来ると、みな口を揃えて「いいところですね」と言う。たしかに構内の建物や木立の向こうにはなだらかな山並みが連なり、空は広く明るい。春には桜並木が満開になり、芝生にはタンポポの花が一面に咲く。クルマの騒音はなく、ときおり構内の保育所から散歩に来る小さな子どもたちの声が聞こえてくる。そのような静穏で快適な環境にいと、人はそのありがたさをつい忘れてしまう。なにもわざわざ外へ出掛けて行かなくても、その前にまず、わたしがほぼ毎日過ごしているこの場所を芸術的に活かすことが先ではないか。わたしにとって日常の場所も、使い次第では芸術的な空間になり得るのではないか。そう考えると、美術棟の前庭や芝生広場は、パフォーマンスを行う場所としてすぐにでも使えそうな気がしたのである。⁽²⁾

初期の「岐阜大学芸術フォーラム」

こうしてわたしは思い立つとすぐに、自分の職場である大学構内の美術棟で「岐阜大学芸術フォーラム」を開くことにした。わたしがアート活動始めてから7年経った2001年のことである。⁽³⁾ 「幻聴音楽会」を通じて知り合った音楽家やスタッフ、友人、知人に声を掛け、学内の教員と学生にアナウンスするためのチラシを制作した（図1）。ただ、チラシには最小限の情報しか載せていない。開催の日時と場所、そして「絵を描く人も見る人も／音楽を作る人も聴く人も／詩を作る人も読む人も／この「場所」に集まって始めよう／「場所の芸術」を」という文言だけである。映像作品「場所の音楽」シリーズの制作時と同様、ここで何をするのか、具体的なことは前もって何も決めなかったからである。それでも、第1回の岐阜大学芸術フォーラムには35名が参加した。

集まったメンバーが、その場で何をするのか思案した結果、作曲家野村誠考案の「しょうぎ作曲」を行うことになった。「しょうぎ作曲」とは複数の人が玄人素人を問わず、共同して作曲することである。さっそく椅子を前庭に持ち出して円形に並べ、紙と色鉛筆を使って、ひとりずつ思い思いの楽器を鳴らしながら音を記譜していき、約1時間半かけて数分間の曲を作り演奏した（図2）。その過程をビデオで撮影、編集し、約10分の映像作品にした。⁽⁴⁾ その作品を見た英文学者の内田勝の文章が、芸術フォーラムの様子を的確に捉えているので、次に紹介する。

第1回のビデオはこのフォーラムの活動を象徴しているようで、もっとも感動的です。冒頭で、輪になって椅子に座った参加者が一人ずつ音を加えていくところ、最初のうちはぎこちなくて、よそよそしくて、音もショ

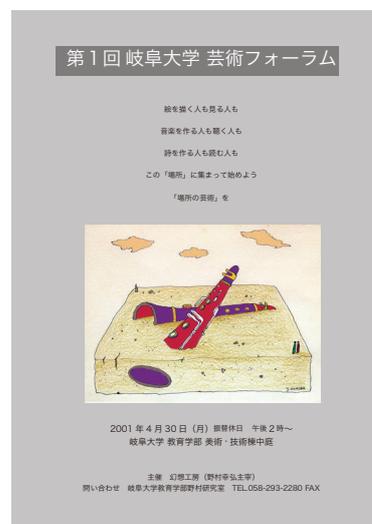


図1 第1回岐阜大学芸術フォーラムのチラシ



図2 第1回岐阜大学芸術フォーラムにおける「しょうぎ作曲」

ポインですけど、そんな恥ずかしい、ちょっといたたまれないほどこわばった空気から、音の数が増えるにつれて、じわじわと音楽が形を成してくる。一人一人は基本的に同じ音を繰り返しているのだろうけれど、そのうちに各自が自分の音を少しずつ変えて遊び始めるあたりで、氷が融けるみたいに音楽が一気に動き出します。あとはラヴェルの「ボレロ」みたいに、ずんずん興奮の度合いが高まっていく。参加者がすっかりくつろいで、ざわざわと楽しげな私語が目立ち始めるころから、俄然音の活気が増しますね。やがてクラリネットの旋律がチンドン屋めいてきて、参加者の誰かが「お祭りみたい」と言う声が聞こえるころになると、演奏者たちのワクワクした気持ちは空気に溶けて、美術棟の外へあふれだします。最後の場面、カメラが美術棟中庭からだんだん離れてゆき、同時に音が周囲の建物や野山に反響しながら広がっていくのをマイクが捉えているところは、このフォーラムのやりたいことを如実に伝えていて秀逸だと思いました。

第2回岐阜大学芸術フォーラムの案内は、チラシ(図3)で広報するほかに、Eメールで次のような案内文を送信した。

来る5月19日(土)午後2時より、岐阜大学教育学部美術・技術棟前庭にて、「第2回岐阜大学芸術フォーラム」を開催いたします。このフォーラムは、毎月定期的にこの場所に集まって「場所の芸術」を始めようという試みです。第1回目の4月30日は、35名の参加者があり、音楽家の山辺義大、片岡祐介、坂野嘉彦各氏のリードで、参加者すべてが楽器を演奏しました。今回はピアノを出して、それに鍵盤ハーモニカが加わり、さまざまな楽器が絡むことになるでしょう。音楽だけでなく、身体表現や、観客席の制作も徐々に進行していくことになると思います。休日の午後のひとときを、自然に囲まれた閑静な大学キャンパスでゆっくり過ごしていただけると幸いです。お時間ありましたら、どうぞ気軽にお出かけ下さい。いろんなジャンルの人が来ますので、とにかく意欲のある人、エネルギーのある人、面白い人々の出会いと交流の場にしたいと考えています。観客・聴衆・傍観者、小・中・高生、年配の方、大歓迎です。

実際に行われた第2回には、前回は上回る約40名の参加者があり、「しょうぎ作曲」の発案者、野村誠が加わって二組に分かれ、さらにパワーアップした作曲・演奏に取り組んだ(図4)。第3回でも多くの参加者が美術棟の前庭で即興演奏を楽しみ、美術教育科の学生たちがその音楽を聴きながら制作を続けた(図5)。第4回からは片岡祐介が音楽講座を開くことになり、自作のマリンバ曲の演奏と、作曲のプロセスを解説した(図6)。第5回では音楽はニュアンスに集中することが大事であることをユーモアを交えて語った。⁽⁴⁾ 第6回では京都を拠点に活動するダンス・カンパニー「モノクローム・サーカス」のメンバーが長野での公演を終えて京都に帰る途中、岐阜大学に立ち寄った。坂本公成、森裕子をはじめ、4人のダンサーが飯田茂実の鍵盤ハーモニカ、ギターと歌に合わせてダンスを披露した(図7)。その後、ピアニストの岡野勇仁やパフォーマーの林加奈、山辺義大、野村誠らが加わり、熱狂的な即興の音楽、ダンスへと発展して行った。

第10回以降は、美術家宇治山田直行がほぼ毎回、芸術フォーラムが始ま

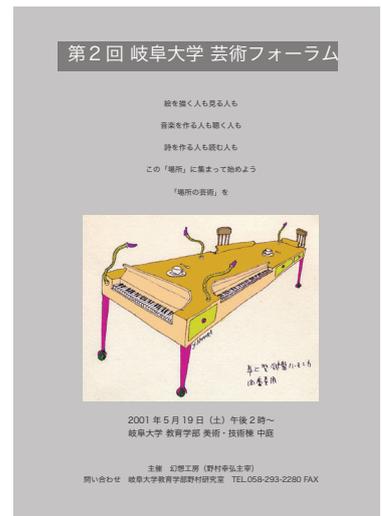


図3 第2回岐阜大学芸術フォーラムのチラシ



図4 第2回における「しょうぎ作曲」



図5 第3回における即興演奏と粘土制作



図6 第4回における片岡祐介の音楽講座



図7 第6回における「モノクロームサーカス」のダンス

る午後2時までに、美術棟前に置かれているさまざまな素材を用いて、短時間でインスタレーションを作り上げた。第10回では、可動式の作業台や古い椅子に、前庭に散在する木片や発泡スチロール製のオブジェを載せたインスタレーションを行った(図8)。美術棟の前庭には授業での制作実習や学生たちが自主制作で使う素材がたくさん置かれている。長期間放置されているので、それら素材の所有者は分からない。卒業生が残して行ったものかもしれない。なかには失敗作なのか習作なのか、制作途中で放棄したらしいものもある。素材から作品に成ろうとして成れずにいるそうした過渡的な物質を一時的に作品化するのが、宇治山田の制作方法である。彼自身はそれをインスタント・インスタレーション(即席仮設芸術)と呼んでいる。岐阜大学芸術フォーラムを始めた頃は、音楽家の参加者が多く、彼らはほぼ毎回、その場で即興演奏をしていたことから、宇治山田は即興で美術作品を作ろうと考えたのだろう。したがってこれはインプロンプテュ・インスタレーション(即興仮設芸術)と言うこともできる。

宇治山田は第11回では美術棟の放置自転車や壊れた自転車のパーツを置いたが、それはマルセル・デュシャンへのオマージュのように見えた(図9)。その後、雨が降り出し、夜になって雪に変わり、翌朝、積雪の自転車の風景が出現した。第12回では置き傘を全部開いて前庭にレイアウトした(図10)。折から吹いてきた風にあおられて、傘はズブズブという音を立てながら、予想もつかない方向へ動き続けた。その傘の動きと音に合わせて、即興の演奏が行われた。また回によっては、インスタレーションに使われた素材が楽器となって、即興でインスタレーションの音楽が上演されることもあった。

第14回では作曲家三輪眞弘が2000年に発表したモノローグオペラ「新しい時代」の作曲動機について語った(図11)。三輪はだれでも口ずさめる歌を作りたいが、それがどうしてもできなかったという。そこで苦肉の策として「新しい時代」教という架空の新興宗教の儀式で歌われる歌という設定なら作れるのではないかと考えた。ネットワーク上に不思議なデータが流れており、そのデータを分析すると、四声体のメロディであることが判明し、それを神のメッセージと受け取る人たちの宗教曲というわけである。その夜、4人のパフォーマーが輪になって座り、手首につけた電極にコンピュータの制御によって微かな電流が流れると反射的に手に持つ鈴が鳴る「流星礼拝」と呼ばれる「儀式」が行われた(図12)。第15回では三輪は「またりさま」という、やはり架空の村で行われている伝統芸能という設定で作られたパフォーマンスを参加者に説明して演奏した(図13)。いずれも、芸術作品は作りたいが、その動機がなくなってしまった、あるいは芸術の発注者がいなくなってしまったセザンヌやゴッホ以降の近現代芸術の行き詰まりを打開しようとする、非常に興味深い試みだと思う。

そのほかにも岐阜大学教育学部の教員熊谷佳代の即興ダンス(第7回)、岐阜大学医学部5年の小足有紀の即興ダンス(第18回・19回・26回)、美術家栗田文恵によるインスタレーション(第3回・第14回)、作曲家山辺義大によるレクチャー(第9回)、デザイナー小寺克彦による写真スライドの上映(第12回・27回・28回)、作曲家野村誠の自作紹介(第13回～22回・34回・44回)、サウンド・アーティスト西哲郎の自作解説(第17回～20回)、作曲家坂野嘉彦の自作紹介(第25回・28回・30回・40回・43回)、美術家平松伸之とジャガー一郎によるインスタレーション(第23回)、音楽家片岡由



図8 第10回における宇治山田直行のインスタント・インスタレーション



図9 第11回における宇治山田直行のインスタント・インスタレーション



図10 第12回における宇治山田直行のインスタント・インスタレーション



図11 第14回における三輪眞弘のレクチャー



図12 第14回におけるパフォーマンス



図13 第15回におけるパフォーマンス

紀による「俳曲」(第28回～)、鷺見祐司の「音日記」(第50回～)、愛知県立芸術大学作曲科の大学院生、牛島安希子、高山葉子、高柳好弘の作品発表(第27回)、神戸大学大学院生の沼田里衣による音楽療法の実践報告(第27回・38回・49回)などが行われた。

「岐阜大学芸術フォーラム」の目的

岐阜大学芸術フォーラムを始めた当初、わたしは自分自身にいくつかルールを課していた。ひとつは、先に書いたように、「芸術フォーラムのテーマや内容をあらかじめ決めておかない」ということである。内容が分からないと、人が集まりにくいことは確かであるが、逆に決めてしまうと、その内容に興味のある人しか参加しない。参加した人が、その顔ぶれを見て、その場で内容を考えて行くほうが、思いがけない展開になる可能性がある。それをわたしは毎回楽しみにしていた。

もうひとつは「参加者全員をかならず紹介すること」である。日本ではどんな会に出席しても、懇親会などで流動性を高めるために立食形式を採用しているにもかかわらず、既知の仲間、グループだけで固まり、自己紹介もせずに話に割り込むといったことが習慣化していて、新しい人間関係を築くことがむずかしい。それを解消するために、わたしは参加者全員を全員に紹介することにしたのである。こうすることで、初対面の人と出会う時の緊張や心理的な負担を軽減し、コミュニケーションが少しでもしやすくなるよう心掛けた。

さらに「最後の参加者が帰るまで閉会しない」ことも、わたしにとって大事なルールだった。たいていのイベントやシンポジウムでは、壇上のパネリストが話すだけで時間が尽きてしまう。観客との質疑応答も、形式的なやり取りで終わってしまいがちだ。これから議論が活発になるというところで、司会者が「時間が参りましたので、これで閉会します」と言って、その先の重要な議論の機会が失われてしまうといったナンセンスが平気で繰り返される。そうした「悪習」を改めたいという思いで、岐阜大学芸術フォーラムでは「最後までとことん付き合う」ことをルールにしたのである。

また展覧会やコンサート、映画、演劇など、芸術に関心のある人たちが、一定の時間、同じ空間で芸術を享受するにもかかわらず、見終わると、すぐに帰ってしまう。もし彼らがそこで知り合いになり、今見たばかりの作品について感想を言い合ったり、意見交換、情報交換ができれば、それは非常に貴重な機会となるにちがいない。鑑賞後にすぐさま言葉にならなくても、長時間、話をしている間に、徐々に自分の考えがまとまってくることもあるだろう。いちど集まった人たちはすぐに別れるのではなく、せっかく集まったのであれば、じっくりと時間を共有する余裕が必要だと考えたのである。そのため芸術フォーラムは、しばしば深夜にまでおよび、明け方まで続くこともあった。そして最後に「続け、やめない」こと。芸術フォーラムの究極の目的は、おそらくこれに尽きると思う。これについては、最後に触れたい。

回を重ねて行くごとに、開催する目的が少しずつ明確になり、岐阜大学芸術フォーラムを広報し、マスメディアの取材に答える際には、それを以下の7つにまとめて説明するようになった。

1. 大学のスペース・施設を広く一般に開放する

大学は本来、開かれた場所ではあるが、まだまだ学外者にとって閉鎖的なイメージがある。学内で毎月、芸術フォーラムを行うことで、大学のスペースや施設を最大限活用したい。

2. 芸術を通して、学内と学外の人と人との交流の場を作る

ふだん学生たちは、学外者、他大学の学生と、知的、学術的、芸術的な交流をする機会に恵まれていない。また学外からのフォーラム参加者には、学内の事情を理解してもらい、互いに刺激的な意見交換ができる。

3. 異なる芸術ジャンル間の交流をうながす

芸術にはさまざまなジャンルがあるが、それらはたいてい縦割りにされ、美術は美術、音楽は音楽、というふうに分離されがちである。じっさい、学内でも美術は美術棟、音楽は音楽棟に分けられ、両者の教員、学生たちの交流はほとんどない、というのが実情である。フォーラムでは、芸術のジャンルを問わず、さまざまな分野の芸術家たちが集まり、作品の発表、意見・情報交換を行う。

4. 芸術家の習作、試作の発表場所を提供する

芸術家の制作過程は、人の目に触れることが少ない。完成した作品を半年か、1年に一度、発表するのが見られ

る程度で、その過程や、ふだんの作業は知られていない。芸術フォーラムでは、毎月、芸術家が習作、試作、制作途中の作品、最近発表した作品の一部などを、構えることなく呈示するため、気軽に作品に接することができる。

5. 作り手と受け手の自由な対話の場所

画廊や美術館、舞台やコンサートホールでは、芸術家と観客の心理的距離が大きく、作品発表の後、作品について自由に話し合うことが難しい。芸術フォーラムでは、作品発表の場所がフラットなので、受け手は率直な質問や感想を作り手に伝えることができ、両者の対等で自由な対話がしやすくなる。

6. ゆったりとした時間を過ごす

美術館やコンサートなど、ふつうの芸術の享受は、せいぜい2～3時間程度である。岐阜大学芸術フォーラムでは、午後2時から参加者が少しずつ集まり、レクチュアや作品発表の場に立会い、夕方まで自由な意見交換やディスカッションを行う。午後6時ごろから夕食の準備を始め、食事をしながら、深夜までそこで新たに知り合った人たちが交流するという、非常にゆとりのある時間を過ごすことが目的である。

7. この場所から発信する芸術を作り上げる

毎月フォーラムを開催することで、この岐阜大学美術棟という固有の場所から、オリジナルの芸術を発信していくことが、フォーラム最大の目的である。

「岐阜大学芸術フォーラム」の展開

芸術フォーラムには、美術家、写真家、書家、作曲家、演奏家、舞踊家、建築家などの芸術家だけでなく、芸術の愛好家や支援者、画廊の経営者、美術館の館長、学芸員、音楽療法士、ピアノ調律師、宮大工、看護師、臨床心理士、小中学校の教諭、学習塾の講師、大学の教員、新聞記者、放送局員、アナウンサーなど、じつにさまざまな職業の人たちが参加する。幼児、小中学生、高校生、定年退職者も参加する。⁶⁾ 芸術をテーマに掲げ、場所と時間を決めることによって、これまで接点のなかった人たちが集まると、そこに新たな出会いと人間関係が生まれる。そしてその場で共有した芸術体験について感じたこと、考えたことを語り合う。

わたしたちは家庭、職場などでは、親や子であったり、上司や部下であったり、社会の中ではかならずどこかに帰属し、そこで、ある一定の役割を担っている。しかしながら、芸術フォーラムの場では、いったんそうした役割から解放され、互いに自由な関係性を保つことができる。同じ大学という場所でも、平日の授業では教員-学生という関係が否応なく成り立ってしまうが、芸術フォーラムではそうした関係にしばられず、教員と学生は対等に接することができる。わたし自身、それが非常に心地よく感じられる。第50回を過ぎたころから、Eメールでの案内文も、次のような書き出しで始めるようになった。

岐阜大学芸術フォーラムは、さまざまなジャンルの芸術家、そして芸術に関心のある人たちが集まり、そこでそれぞれ現在の活動や、試行中の作品、習作、リハーサル、今後の活動予定などを紹介する場です。その場ですぐに意見交換、情報交換が行われるラフでインティミットなスタイルの会なので、どなたでも自由に気軽に参加できます。是非、お越し下さい。

芸術が成立する世界では、通常、作り手と受け手という2つの役割に分かれ、芸術フォーラムでもそうした関係がしばしば見られる。しかしながら、これら両者の関係はかならずしも固定的ではなく、そのつど入れ替わる。作曲家と演奏家、演奏家と聴衆、聴衆と作曲家が何度も交代する。ふだん芸術の作り手ではない参加者も、たとえば野村誠の「しょうぎ作曲」では、文字通り作曲もするし、演奏もする。三輪眞弘の作品でも、試行的ではあるにしても、音楽家ではない参加者がパフォーマーとなっている。そもそも芸術フォーラムの参加者の多くが、すでにほかのフィールドで何らかの作り手、送り手でもある。つまりひとりひとりの参加者が、作り手であると同時に受け手なのである。

そうした参加者は、すでに彼ら彼女ら自身が拠点としている場所で、何らかの活動を自主的に展開しており、何か興味を惹かれるものがあれば、どこにでも足を運んでいる。従来ならば、文化・芸術に関心のある人は、首都圏や大都市に行くのが通常だったが、1990年代後半あたりからインターネットが急速に発達したこともあって、情報さえあれば、どこにでも自由に移動するようになった。岐阜という地方都市で行われている芸術フォーラムにも、

こうして開催当初から、近隣の愛知、三重は言うまでもなく、京都、奈良、大阪、神戸、和歌山、浜松、横浜、東京など、さまざまな地域からの参加があった。中小都市から大都市へというこれまでの一方通行的な流れとは逆に、大都市から中小都市へという流れが出てきたのである。⁶⁾

岐阜大学芸術フォーラムは、2008年6月の第75回までは、毎回、美術棟で開催していたが、それ以降は、岐阜市内にあるわたしの「アトリエ幻想工房」や岐阜県美術館、岐阜県現代陶芸美術館、岐阜市でつめいギャラリー、岐阜市じゅうろくプラザ、岐阜大学サテライト・キャンパスなど、時々、開催場所を変えることもあった。そして県外との交流が始まると、それら参加者とのつながりの中で、芸術フォーラムは、岐阜以外にも「出張」し、浜松市のアルス・ノーヴァ、デザイン・クリエイティブセンター神戸 KIITO、京都の甘夏ハウスなどでも開催した。

こうした交流の中から、新たな作品が次々に生まれて行った。2004年4月から芸術フォーラムに参加した神戸の沼田里衣の依頼で、後に「第26回幻聴音楽会—運河の音楽」(神戸市兵庫運河、2009年3月21日)を開くことになり、また2006年8月開催の第53回岐阜大学芸術フォーラムに浜松の「NPO法人クリエイティブサポートLet's」の久保田翠が参加したことから交流が始まり、浜松で「第22回幻聴音楽会—照明の音楽」(2008年3月9日)、および「第23回幻聴音楽会—街路の音楽」(2008年3月30日)を行うことにもなった。当時、京都を拠点に活動していた野村誠とは、長野、静岡、千葉、滋賀、バーミンガム、バンコク、ジョグジャカルタなどでのワークショップや即興演奏の映像制作を多数、行うことになった。

2010年7月に第100回を迎えたが、それを記念して「岐阜大学芸術フォーラムの歌」(岡野勇仁・野村幸弘作詞、岡野勇仁作曲)が作られ、披露された。この歌は芸術フォーラムの性格を端的に示していると言えるだろう。歌詞は以下の通り。

| | |
|-----------------|-----------------|
| 1. | 2. |
| フリーフラット 垣根なく | 愛と勇気とリラックス |
| 西に東に 上下なく | 夢と気合とやわらかさ |
| 楽しく軽く仲良く熱く | ゆったりいこう まったりいこう |
| 今日も明日も フラットに | つながろう ほめあおう |
| いざすすめ とともに | 世界につたえよう |
| 岐阜大 岐阜大学芸術フォーラム | 岐阜大 岐阜大学芸術フォーラム |

芸術フォーラムを経験した人に薦められ、初めて岐阜大学を訪れる人は、「岐阜大学芸術フォーラム」という名称が堅苦しく敷居の高い印象を与えるせいか、開始時間の午後2時きっかりに来学する。毎回定刻に来る人はほぼいないので、事情を知らない初参加者は、主催者であるわたしと初対面でいきなり突っ込んだ話をするハメになる。こうした思いがけない出会いもわたしにとって、毎回新鮮だった。わたしたちは、日々、さまざまな人と会うが、たいていは簡単な挨拶か、ちょっとした雑談、短時間の事務的なやり取りで、ほんの少しだけ言葉をかわすに過ぎない。親しい人は別にして、あまりよく知らない人と深い話をする経験はほぼないだろう。芸術フォーラムに初めて参加する人たちとなら、そうした通常ではあり得ないような対話が可能となる。時間をかけて話をする、参加者の話はいずれも興味深く、わたしは次の回に、その人に講師になってもらい、作品の発表や話題提供、レクチャーなどをしてもらうようになった。

芸術フォーラムで講師を務めた人に次の講師を推薦してもらおうというリレー形式を採用することもあった。それが続かなくなると、岐阜大学の教員をはじめ、わたしが興味深いと思った近隣の大学の研究者に声を掛け、ヴォランティアでレクチャーをお願いした。それは、前もって芸術フォーラムのテーマを決めないという原則から外れることではあったが、それでもその講師や特定のテーマに関心を持つ人が集まり、そこに参加した人たちが時間を気にせず、じっくり意見を交わすことに十分意味があると考えた。このようにして、芸術フォーラムに参加する人の数は、少しずつ増え、Eメールによる開催案内の送り先は、第100回を迎えたころには、300人を超えていた。

「岐阜大学芸術フォーラム」という時間

社会学者の小松田儀貞は、その著『社会化するアート／アート化する社会』の中で、「岐阜大学芸術フォーラム」

を取り上げて次のように書いている。

普段、仕事や家庭を持ちそれに囚われがちな「普通の」人々にとって、形式ばらずに（インフォーマルなあるいはそれに近い形で）さまざまな芸術や知識に触れ、それについてオープンに語り合う場は貴重である。このことは長い目で見れば、豊かな眼を持つ鑑賞主体・享受者や創作者を育むことにもつながるだろう。市民と文化芸術をつなぐ契機が、こうした日常的な社会生活の中にあるとすれば、作り手と受け手の豊かな関係はそうした環境の中でこそ培われるのではないか。（中略）アート／アーティストと地域との豊かな関係は、一朝一夕に形成されるものではない。互いの関係は関心の範囲や濃淡も異なる多様な主体＝アクターを媒介にしながら、豊かになっていくのではないか。ここにはそうしたアートと地域の幸福な関係の一事例を見出すことができる。⁽⁷⁾

幻聴音楽会のような非日常的なアート・パフォーマンスではなく、日常の生活を芸術化すること。月1回の開催ではあるが、そうした日常が積み重なって、やがてひとつの作品に結実する。その過程を目撃し、共有する受け手が同じ場にいる。これが「岐阜大学芸術フォーラム」の目的の7つ目に掲げた「毎月フォーラムを開催することで、この岐阜大学美術棟という固有の場所からオリジナルの芸術を発信していくこと」になるだろう。

政治学者の白井聡は、現代の資本主義社会を変えていくうえで必要なことは、食を中心とした「感性の再建」と言い、こう書いている。

食にこだわることは、人生を楽しむこと、幸福ということ、人間性の回復にもつながってきます。それこそ最も感性的な部分で、思想ではない、センスの世界です。（中略）「私たちはもっと贅沢を享受していいのだ」と確信することです。贅沢を享受する主体になる。つまり豊かさを得る。（中略）どうしたらもう一度、人間の尊厳を取り戻すための闘争ができる主体を再建できるのか。そのためには、ベーシックな感性の部分からもう一度始めなければならない。だから、食べ物の話は、代表的な事例であると同時に比喻でもあります。私たちの生活の全領域で、どういう感性を持つのが問われている。⁽⁸⁾

同じようなことを哲学者の國分功一郎も書いている。「贅沢とは浪費することであり、浪費するとは必要の限界を超えて物を受け取ることであり、浪費こそは豊かさの条件であった。（中略）〈物を受け取ること〉とは、そのものを楽しむことである。たとえば、衣食住を楽しむこと、芸術や芸能や娯楽を楽しむことである」として、ウィリアム・モリスに言及する。

彼（モリス）は芸術が民衆のなかに入っていかなければならないと考えた。生活のなかには芸術が入って行くこと、つまり日用品、生活雑貨、家具、衣服等々、民衆が日常的に触れるもののなかには芸術的価値が体現されることだ。それが「民衆の芸術」である。そのとき現れる生活とは、そのなかには生きる私たち一人一人が、そうした芸術作品を味わうことのできる生活である。⁽⁹⁾

文化・芸術に携わる人、関心のある人なら、だれもがそうした生活がいかに大切であるかをとくに理解しているだろうし、わたしが美術史研究やアート活動を行い、芸術フォーラムを開催しているのも同じ理由からである。しかしこのような生活を望んでもそれが許されない状況にある人たちがたくさんいることも事実である。芸術フォーラムを始めた2001年以降に限っても、数多くの自然災害やそれに伴う愚かしい人災が起り、紛争や戦争が今なお続いている。毎日のようにそうした情報に接している日常生活を、わたしたちはどのように過ごして行けばいいのか。この難しい問題を四六時中考えているわけにはいかないが、少なくとも月に1回はこの過酷な現実を忘れず、いつ自分自身がそうした状況に陥っても、その現実と直面する覚悟を確認する日を意識的に作るこそが芸術フォーラムを開く目的、というよりも意味だとわたしは考える。したがって、芸術フォーラムは、先に書いたように、わたしが生きている限り「続け、やめない」のである。⁽¹⁰⁾

わたしは自分のいる場所をいかに意味のあるものにしていくのか、そのことを作品制作のテーマにしてきたが、それは同時に、その場所に流れている時間をどう使うのか、ということでもあった。とくに岐阜大学芸術フォーラ

ムは、場所以上に時間が重要であると考えられるようになった。それは新型コロナ禍によって、わたしたちは直接、出会うことができなくなったとはいえ、オンラインで繋がることで、少なくとも同じ時間を共有することは可能だったことにもよるだろう。⁽¹¹⁾ したがって、岐阜大学芸術フォーラムという「活動」は、今後、マルセル・デュシャンを評した次の言葉のような「作品」となることを目指そうと思う。

彼のもっとも美しい作品は彼の時間の使い方である。⁽¹²⁾

註

(1) 幻聴音楽会については、拙論「場所の芸術（1）—初期のダンス公演と幻聴音楽会」『岐阜大学教育学部研究報告—人文科学』第69巻 第2号 2021年 85-94頁、同「場所の芸術（2）—第14回～第31回幻聴音楽会」『岐阜大学教育学部研究報告—人文科学』第70巻 第1号 2021年 89-99頁を参照。

(2) もっともわたしが最初にパフォーマンスを企画したのは、大学図書館の中庭におけるダンス公演「失われた形態のための習作」(1994年5月10日)であり、その後、学外の空間へ出て行ったので、ある意味、原点に戻ったとも言える。

(3) 岐阜大学芸術フォーラムは2001年4月に始まり、文科省の在外研究で日本を不在にした2003年の10か月間と新型コロナの感染が拡大した2020年の5か月間を除いてほぼ毎月1回開催し、2023年11月時点で250回を数える。

(4) 岐阜大学芸術フォーラムの主催は、わたしが1994年以結成したアーティスト集団「幻想工房」である。そのメンバーによってチラシや映像の制作が行われている。彼らは岐阜大学芸術フォーラムでは次のような役割を果たしている。文・構成：前慎二、来野裕二、デザイン：麻伊桂史、写真：伊尾森朗、ビデオ：早野盛人 編集：原忠司 インスタレーション：宇治山田直行。立体造形：黒野須美太郎。(以下、文中の敬称略。)第1回から第100回までについては、撮影・編集した映像作品を、次の回の芸術フォーラムで紹介するようにしていた。したがって参加者はつねに前回の芸術フォーラムでどんなことが行われたのかをビデオから知ることができた。

(4) その後も片岡は、岐阜大学芸術フォーラムで、障害者とのセッションの分析(第7回・16回・20回・30回)、コンピュータを操作して作る音を音楽として聴いてしまう耳の不思議さ(第9回)、リズムの話(第10回)、琴を用いた新しい音楽(第13回)など、楽しく分かりやすい講座を次々に行った。

(5) 当時、小学2年だった川本琢人は、両親の川本琢二、伊佐地紀子とともに、2009年12月開催の第93回岐阜大学芸術フォーラムに初参加して以来、2019年に大学に入学するまでの10年あまり、毎月、欠かさず来ていた。

(6) 1994年新潟に地域活性化策「ニューにいがた里創プラン」が策定され、越後妻有トリエンナーレが2000年に始まったのも、こうした背景の中から生まれてきたと考えられるだろう。

(7) 小松田儀貞『社会化するアート／アート化する社会』水曜社、2022年、110-112頁。

(8) 白井聡『武器としての「資本論」』東洋経済新報社、2020年、277-282頁。

(9) 國分功一郎『暇と退屈の倫理学』朝日出版社、2011年、338-356頁。

(10) 横尾忠則は坂本龍一の『ぼくはあと何回、満月を見るだろう』の書評の中で「芸術的創造はそれ自体が反社会的で、平和理念を内包しているのだから、あえてプロパガンダ的行動を起こす必要がないというのが僕の考えである。」と書いているが(2023年9月11日付け朝日新聞)、芸術フォーラムもまた平和を維持する日常的実践であるとわたしは考えている。

(11) もちろん新型コロナ禍の経験後、わたしたちは現実の場所がいかに貴重であるかを再認識した。大学でのわたしの授業はすべて、一方通行的な座学をやめ、講義内容をすべてビデオにして、学生はそれを視聴した後、教室に集まり、その講義内容について、学生たち自身が議論するという「反転授業」の形式に変えた。同じ場所に人が集まるということ、その時間を共有すること、そして語り合えること。それが失われた事実を忘れないこと。わたしはそのような授業を行うことにしたのである。

(12) P. カバンヌがM. デュシャンにインタビューした本の序文で引用している、アンリ=ピエール・ロシェが言った言葉(M. デュシャン、P. カバンヌ『マルセル・デュシャンの世界』朝日出版社、1978年、11頁)。

岐阜大学芸術フォーラム 開催場所・日時

| | | | | | |
|------|-------------|-------------|-------|---------------|-------------|
| 第1回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2001年4月30日 | 第64回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2007年7月16日 |
| 第2回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2001年5月19日 | 第65回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2007年8月13日 |
| 第3回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2001年6月10日 | 第66回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2007年9月2日 |
| 第4回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2001年7月8日 | 第67回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2007年10月28日 |
| 第5回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2001年8月25日 | 第68回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2007年11月23日 |
| 第6回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2001年9月16日 | 第69回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2007年12月26日 |
| 第7回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2001年10月21日 | 第70回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2008年1月6日 |
| 第8回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2001年11月18日 | 第71回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2008年2月9日 |
| 第9回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2001年12月23日 | 第72回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2008年3月15日 |
| 第10回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2002年1月14日 | 第73回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2008年4月26日 |
| 第11回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2002年2月11日 | 第74回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2008年5月10日 |
| 第12回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2002年3月24日 | 第75回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2008年6月21日 |
| 第13回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2002年4月21日 | 第76回 | アトリエ幻想工房(岐阜) | 2008年7月22日 |
| 第14回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2002年5月26日 | 第77回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2008年8月14日 |
| 第15回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2002年6月16日 | 第78回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2008年9月13日 |
| 第16回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2002年7月14日 | 第79回 | アトリエ幻想工房 | 2008年10月19日 |
| 第17回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2002年8月18日 | 第80回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2008年11月8日 |
| 第18回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2002年9月14日 | 第81回 | アトリエ幻想工房 | 2008年12月28日 |
| 第19回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2002年10月26日 | 第82回 | アトリエ幻想工房 | 2009年1月31日 |
| 第20回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2002年11月24日 | 第83回 | アトリエ幻想工房 | 2009年2月21日 |
| 第21回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2002年12月23日 | 第84回 | アトリエ幻想工房 | 2009年3月8日 |
| 第22回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2003年1月25日 | 第85回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2009年4月18日 |
| 第23回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2003年2月8日 | 第86回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2009年5月9日 |
| 第24回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2003年3月9日 | 第87回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2009年6月20日 |
| 第25回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2004年4月24日 | 第88回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2009年7月18日 |
| 第26回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2004年5月28日 | 第89回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2009年8月15日 |
| 第27回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2004年6月26日 | 第90回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2009年9月5日 |
| 第28回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2004年7月17日 | 第91回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2009年10月15日 |
| 第29回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2004年8月21日 | 第92回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2009年11月7日 |
| 第30回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2004年9月25日 | 第93回 | 岐阜県美術館 | 2009年12月12日 |
| 第31回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2004年10月23日 | 第94回 | アトリエ幻想工房 | 2010年1月9日 |
| 第32回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2004年11月27日 | 第95回 | アトリエ幻想工房 | 2010年2月6日 |
| 第33回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2004年12月25日 | 第96回 | アトリエ幻想工房 | 2010年3月14日 |
| 第34回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2005年1月29日 | 第97回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2010年4月29日 |
| 第35回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2005年2月27日 | 第98回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2010年5月22日 |
| 第36回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2005年3月21日 | 第99回 | アルス・ノーヴァ(浜松) | 2010年6月12日 |
| 第37回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2005年4月30日 | 第100回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2010年7月24日 |
| 第38回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2005年5月28日 | 第101回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2010年8月13日 |
| 第39回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2005年6月25日 | 第102回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2010年9月18日 |
| 第40回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2005年7月9日 | 第103回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2010年10月23日 |
| 第41回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2005年8月14日 | 第104回 | アトリエ幻想工房 | 2011年1月29日 |
| 第42回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2005年9月17日 | 第105回 | アトリエ幻想工房 | 2011年2月19日 |
| 第43回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2005年10月22日 | 第106回 | 岐阜県現代陶芸美術館 | 2011年3月19日 |
| 第44回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2005年11月26日 | 第107回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2011年4月23日 |
| 第45回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2005年12月24日 | 第108回 | てつめいギャラリー(岐阜) | 2011年5月14日 |
| 第46回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2006年1月8日 | 第109回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2011年6月25日 |
| 第47回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2006年2月5日 | 第110回 | じゅうろくプラザ(岐阜) | 2011年7月3日 |
| 第48回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2006年3月11日 | 第111回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2011年8月13日 |
| 第49回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2006年4月15日 | 第112回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2011年9月17日 |
| 第50回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2006年5月27日 | 第113回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2011年10月15日 |
| 第51回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2006年6月24日 | 第114回 | アトリエ幻想工房 | 2011年11月12日 |
| 第52回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2006年7月16日 | 第115回 | アトリエ幻想工房 | 2011年12月3日 |
| 第53回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2006年8月15日 | 第116回 | アトリエ幻想工房 | 2012年1月28日 |
| 第54回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2006年9月23日 | 第117回 | アトリエ幻想工房 | 2012年2月19日 |
| 第55回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2006年10月15日 | 第118回 | アトリエ幻想工房 | 2012年3月24日 |
| 第56回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2006年11月25日 | 第119回 | アトリエ幻想工房 | 2012年4月14日 |
| 第57回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2006年12月25日 | 第120回 | アトリエ幻想工房 | 2012年5月12日 |
| 第58回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2007年1月27日 | 第121回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2012年6月23日 |
| 第59回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2007年2月24日 | 第122回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2012年7月14日 |
| 第60回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2007年3月29日 | 第123回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2012年8月19日 |
| 第61回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2007年4月28日 | 第124回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2012年9月8日 |
| 第62回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2007年5月20日 | 第125回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2012年10月21日 |
| 第63回 | 岐阜大学教育学部美術棟 | 2007年6月17日 | 第126回 | アトリエ幻想工房 | 2012年11月10日 |

- 第127回 アトリエ幻想工房 2012年12月2日
- 第128回 アトリエ幻想工房 2013年1月13日
- 第129回 アトリエ幻想工房 2013年2月16日
- 第130回 アトリエ幻想工房 2013年3月9日
- 第131回 アトリエ幻想工房 2013年4月20日
- 第132回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2013年5月19日
- 第133回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2013年6月9日
- 第134回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2013年7月27日
- 第135回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2013年8月10日
- 第136回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2013年9月14日
- 第137回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2013年10月5日
- 第138回 アトリエ幻想工房 2013年11月16日
- 第139回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2013年12月14日
- 第140回 デザイン・クリエイティブセンター神戸KIITO 2014年1月12日
- 第141回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2014年2月22日
- 第142回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2014年3月22日
- 第143回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2014年4月26日
- 第144回 アトリエ幻想工房 2014年5月24日
- 第145回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2014年6月7日
- 第146回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2014年7月26日
- 第147回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2014年8月30日
- 第148回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2014年9月27日
- 第149回 アトリエ幻想工房 2014年10月18日
- 第150回 甘夏ハウス(京都) 2014年11月29日
- 第151回 アトリエ幻想工房 2014年12月13日
- 第152回 アトリエ幻想工房 2015年1月10日
- 第153回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2015年2月14日
- 第154回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2015年3月14日
- 第155回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2015年4月4日
- 第156回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2015年5月2日
- 第157回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2015年6月13日
- 第158回 岐阜大学教育学部美術棟 2015年7月18日
- 第159回 岐阜大学教育学部美術棟 2015年8月8日
- 第160回 岐阜大学教育学部美術棟 2015年9月12日
- 第161回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2015年10月10日
- 第162回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2015年11月14日
- 第163回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2015年12月26日
- 第164回 岐阜大学教育学部美術棟 2016年2月13日
- 第165回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2016年3月26日
- 第166回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2016年4月30日
- 第167回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2016年5月21日
- 第168回 アトリエ幻想工房 2016年6月25日
- 第169回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2016年7月16日
- 第170回 アトリエ幻想工房 2016年8月13日
- 第171回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2016年9月17日
- 第172回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2016年10月15日
- 第173回 アトリエ幻想工房 2016年11月19日
- 第174回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2016年12月17日
- 第175回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2017年1月28日
- 第176回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2017年2月25日
- 第177回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2017年3月11日
- 第178回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2017年4月8日
- 第179回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2017年5月20日
- 第180回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2017年6月17日
- 第181回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2017年7月8日
- 第182回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2017年8月5日
- 第183回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2017年9月16日
- 第184回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2015年10月7日
- 第185回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2017年11月18日
- 第186回 ちそう菰野(三重) 2017年12月16日
- 第187回 ロイヤル劇場ビル会議室(岐阜) 2018年1月26日
- 第188回 ロイヤル劇場ビル会議室 2018年2月17日
- 第189回 ロイヤル劇場ビル会議室 2018年3月3日
- 第190回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2018年4月14日
- 第191回 ロイヤル劇場ビル会議室 2018年5月12日
- 第192回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2018年6月23日
- 第193回 ロイヤル劇場ビル会議室 2018年7月28日
- 第194回 カルチエ・ラタン(名古屋) 2018年10月13日
- 第195回 岐阜大学講堂 2018年11月4日
- 第196回 ロイヤル劇場ビル会議室 2018年12月8日
- 第197回 ロイヤル劇場ビル会議室 2019年1月26日
- 第198回 ロイヤル劇場ビル会議室 2019年2月6日
- 第199回 ロイヤル劇場ビル会議室 2019年3月9日
- 第200回 ロイヤル劇場ビル会議室 2019年4月27日
- 第201回 ロイヤル劇場ビル会議室 2019年5月25日
- 第202回 ロイヤル劇場ビル会議室 2019年6月22日
- 第203回 旧加藤邸(岐阜) 2019年7月27日
- 第204回 ロイヤル劇場ビル会議室 2019年8月10日
- 第205回 ロイヤル劇場ビル会議室 2019年9月14日
- 第206回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2019年10月19日
- 第207回 ロイヤル劇場ビル会議室 2019年11月16日
- 第208回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2019年12月14日
- 第209回 岐阜大学サテライト・キャンパス 2020年1月25日
- 第210回 ロイヤル劇場ビル会議室 2020年2月15日
- 第211回 オンライン 2020年8月8日
- 第212回 オンライン 2020年9月19日
- 第213回 オンライン 2020年10月24日
- 第214回 ギャラリー幻想工房(名古屋) 2020年11月14日
- 第215回 オンライン 2020年12月12日
- 第216回 オンライン 2021年1月23日
- 第217回 オンライン 2021年2月27日
- 第218回 オンライン 2021年3月27日
- 第219回 オンライン 2021年4月27日
- 第220回 オンライン 2021年5月22日
- 第221回 オンライン 2021年6月12日
- 第222回 オンライン 2021年7月10日
- 第223回 オンライン 2021年8月10日
- 第224回 オンライン 2021年9月10日
- 第225回 オンライン 2021年10月10日
- 第226回 オンライン 2021年11月10日
- 第227回 オンライン 2021年12月10日
- 第228回 オンライン 2022年1月8日
- 第229回 オンライン 2022年2月20日
- 第230回 オンライン 2022年3月13日
- 第231回 オンライン 2022年4月17日
- 第232回 オンライン 2022年5月15日
- 第233回 オンライン 2022年6月12日
- 第234回 オンライン 2022年7月31日
- 第235回 オンライン 2022年8月28日
- 第236回 オンライン 2022年9月11日
- 第237回 ギャラリー幻想工房+オンライン 2022年10月1日
- 第238回 ギャラリー幻想工房+オンライン 2022年11月6日
- 第239回 ギャラリー幻想工房+オンライン 2022年12月4日
- 第240回 オンライン 2023年1月22日
- 第241回 オンライン 2023年2月19日
- 第242回 ギャラリー幻想工房+オンライン 2023年3月19日
- 第243回 ギャラリー幻想工房+オンライン 2023年4月16日
- 第244回 ギャラリー幻想工房+オンライン 2023年5月14日
- 第245回 ギャラリー幻想工房+オンライン 2023年6月4日
- 第246回 オンライン 2023年7月9日
- 第247回 オンライン 2023年8月5日
- 第248回 オンライン 2023年9月16日
- 第249回 オンライン 2023年10月29日
- 第250回 ギャラリー幻想工房+オンライン 2023年11月18日

*本研究は、科学研究費の助成による基盤研究B「社会とアートの共進化的動態とartificationの諸相に関する領域横断的研究」(課題番号:20H01576)の成果の一部である。